
自堕落な買い物

2H2O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自堕落な買い物

【Nコード】

N3242K

【作者名】

2H2O

【あらすじ】

これといって何の意味もない、普通の買い物での出来事。

そこはかとなく寒さが毎日を浸食してくるこの秋という季節、ふとバナラの、それもちよつと黄色っぽいムダ甘いタイプじゃなく、初雪みたいな真っ白のミルクリーな味したアイスクリームを食べたくなった僕は、だらしない部屋着を着替えて外のスーパーに行く事にした。

服に関しては今まで知識をあまり頭に入れなかった僕は服の名前なんかあまり分からない。だからテクトーに、膝あたりが白く色褪せたジーパンに、袖が黒の冬用Tシャツを身につけ、深緑のジャンパーを羽織った。パツと見にはかなり地味なわけだが、僕は外観じゃなくて機能性を追求するんだと誤魔化しておく。

さて、お目当てのカップアイスクリームは約百円くらいなので、五百円ぐらいしか入っていない僕のこの財布も役に立ってくれるだろう。今年の初め、自分で購入した（といっても出資は親）茶色の安皮財布をジャンパーのポケットに入れて、ジッパーを閉じた。ついでにケータイを内ポケットに放り込む。

リビングで夕食の準備をしている母親に一声かけて、僕は玄関のドアを開けた。「馳男？何してんの？」

声の主を探して後ろを向くと、我が姉上が自室のドアから頭だけだしてこっちを見ていた。

「ああ、アイスクリーム買いに行くの？へえ、姉ちゃんにも買ってきてよ。え？お金？はいはい、わかったわよ、はい、百円でたりるでしょ？あ、そうそう、あたしはチョコチップクッキーね。大丈夫？間違えないでよ？赤と白のカップだから。」

ここは無難にいいよと返事しておいて、僕は姉から百円玉を受け取った。

さっさと自分の部屋にまたこもってしまった我が姉を背を向けて、やっとこさ僕は玄関のドアを開ける。

ゆっくり開けたから数秒間出来た「ドアの隙間」から、ぴりぴりと肌をなぜる冷たい空気が流れ込んだ。

ああ、寒いや。

バツとドアを大きく開け、僕は外にでた。目指すスーパーはこのマンションの真ん前に存在し、未だに灯った電気の明かりがここからもよくみえた。

ふうっ、と体内にたまった二酸化炭素を吐きだして見ると、暦では秋なのに、その息は真っ白だった。

さて。

黄昏るのもこの辺にして、これぐらい白いバニラアイスクリームを買いに行くでしょう。

螺旋階段を降りてすぐ、

駐輪場に着いた僕は、自分の自転車のところへ行って鍵を開けた。

ガシヤッというロック解除のスライド音が誰もいない駐輪場に響く。その時、

冷たい風が吹いたわけでもないのに寒気がし、僕は自分の腕を擦った。さっさと行こう。今日は気分がセンチメンタルらしい。

鍵を開けた自転車を駐輪場の外まで押していき、そこでやっとこさサドルにまたがった。僕はひんやりした空気を吸い込んで、自転車をこぎ始めた。

僕の向かうスーパーは、

ホームセンターに服飾販売店、さらに喫茶店の間に挟まれるようになってる。上記の4つの店は古い2Dのゲームみたいに横一列に並んで建てられていて、全て同じ土地に有るため駐車場がそこそこ広い。

とは言っても時間的にホームセンターはもう閉店しているから、広い駐車場の半分は入れないようにチェーンで規制されていた。そう、ホームセンターが4軒の店舗の中で一番規模が広いのだ。

僕は夜の中、さらに黒く染まったアスファルトの駐車場を自転車で

こぐ。この時間帯、駐車場にはあまり車が止まっていなかったの
でナナメに最短距離を進む事が出来た。僕はスーパーの駐輪ス
ペースに自転車を止め、肺の中に溜まった空気を吐きだす。足が
少しだけジンジンしびれ、心臓がドクドクいつてるのを感じた。

ダメだな、日頃運動してないから、身体がびっくりするんだ。

スツと息を吸い込むと顔を上げた。スーパーの前面に張られた窓
ガラスからは店内の黄色い光が大量にもれて、まるで真っ黒な
夜の闇に意地をはってようだった。

…。

外からみる限り、お客さんもパラパラとしかいないようだ。ま、
客の入りようと僕の買い物はあまり関係ないけどね。

僕はとにもかくにも、黄色い光りの中へ入って行くことにした。

アイスクリームの売っているコーナーは、入り口から一番離れた
所にあっただと思う。僕は入り口のそばにある、プラスチックで
作られたよくある買い物カゴをみた。まあ、姉と僕の分しか買
わないつもりなので別にいらないだろう。

僕は入り口から出発してレジの列の前を素通りしながら、入
り口と反対方向に設置されている業務用のドでかい電気ク
ーラーボックスにたどり着いた。ちなみにこのアイスとか冷凍食
品とかを陳列しているク
ーラーボックスみたいなのが果たしてホントにそんな名前な
のかは知らない。別に知りたいとも思わないしね。

ただ、普段生活してる中で結構名前を知らないモノが多いもの
だなと思っただけさ。

さあ、そんなことはともかく、早いとこアイスクリームを買おう。
たしかカップの、単体のアイスクリームはファミリー用のク
ーラーボックスの下に…。

あった。

僕はお目当てのバニラアイス、その名も「ミルキーじゃこ
ちゃん」を手にする。危なかった。やはりこのアイスはかなり
の人気なのだ。

ろう。僕が手に入れたものが最後の一個だったのだ。そう、日本のバニラアイスクリームの中で、この「ミルキーじゃこちゃん」を越えるアイスはないだろう。

初雪のような純白の色、

ほのかに立ち上る芳醇なミルクの香り、口に含んだ時の口溶けや絶妙な甘さは正に官能的とさえ――

「ゲホ、ゴホンゴホン！」

突然、近くでされた咳の音によって僕は一気に現実引き戻された。咳の聞こえた方を見ると、水色のキャップをかぶり、肩まで髪を伸ばした少女がこつちを向いて鼻をすすっている。鼻水は僕からは確認できなかったが、おそらく鼻から鼻水が露出しそうになった時にすすったんだろう。にしても、咳して鼻水出そうになるなんて何か変わった娘だなー、と思ってみたり。

そういえば、彼女の服装を描写するのを忘れていた。そのせいでこの少女が全裸という思い違いをされかねないしねえ。とは言ったものの、実際彼女の服装はそんな面白味のあるものではなく、彼女が通っているであろう学校の制服の上に赤のジャケットを羽織っているといったものだった。

で、だ。彼女はじっと僕を見ている事に気が就いた。いや、てれるね。

まあ、冗談はさておき、ホントの事を言えばおそらく彼女は僕を見ている訳じゃないだろう。そこで試しに僕は持っていた「ミルキーじゃこちゃん」を左右に振ってみた。すると彼女の首も左右に動いた。

なんだかその様子が面白かったので、次に僕はアイスを円を描くようにゆっくり回してみた。彼女はまるで僕の持っているアイスとくるくる回るダンスでも踊るかのように首を動かした。阿呆の娘なのか？

ひよっとしたらそんな失礼な考えが彼女に通じてしまったのかもしれない。

くるくる首を扇風機みたいに動かしていた彼女は急にキッと僕を一瞥すると、

ものっそい早さで持ってた「ミルキーじゃこじゃん」を奪いとり、そのまましゅばいっあっ！っ！と走って行ってしまった。

間違いない、あの時、彼女の右手はシャイニングフィンガーだった。僕はこの目で奇跡を見たのだ。

結論から言うと、今僕はスーパーの外、駐輪スペースに立っていた。そばには自分の自転車、左手には買い物袋。

あの後、つまりは水色キャップの少女に欲しかったアイスを取られた後、呆然としていた僕はとりあえず姉の要望どうりチョコチップクッキー味のアイスを、そしてかわいそうな僕自身にはミックスジュースを 購入した。レジに行った時に、相手の店員さんが美人だったのがせめてもの救いだね。

さて、帰ろうか。不思議な少女にシャイニングフィンガーも見れたしね。

今思うとひよっとして彼女はガンダムファイターだったのかも知れない。

まあ多分違うだ

ろうケド。

僕はため息をつき、また冷たい空気を吸って、袋から取り出したミックスジュースを飲んだ。

いろんな果物の、まろやかな甘さが口に広がる。

「……うまい」

僕はジュースの蓋を締め、袋にまた放り込んだ。

さて、帰りますか。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3242k/>

自堕落な買い物

2011年1月19日00時05分発行